

令和 6 年 6 月 19 日現在

機関番号：12611

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：19K14441

研究課題名（和文）自閉スペクトラム症の成人女性の「社会適応」に関する臨床心理学的研究

研究課題名（英文）A clinical psychological study on social adaptation of autistic women

研究代表者

砂川 芽吹（Sunagawa, Mebuki）

お茶の水女子大学・基幹研究院・助教

研究者番号：70823574

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、自閉スペクトラム症（以下、ASD）の女性の「社会適応」について、当事者の認識と具体的な適応行動について検討した。本研究を通して、ASDの女性は社会に適応するための意識的・無意識的な適応行動をとる一方で、日々の生活の安定を維持するために、社会との折り合いをつけながら生きていることが示唆された。また、社会適応のあり方は、性によって異なる社会的期待や、ライフステージ等の違いが影響していると考えられた。これらを踏まえて支援においては、ありのままの自分が受け入れられる環境の重要性に加えて、当事者に変容を求めるのではなく、周囲の環境を含めた社会が変わっていくことの必要性が指摘された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義として、まずASDの女性に着目した点があり、ASDの女性の「社会適応」について、従来の男性ベースの理解とは異なる困難と支援のニーズを示した。さらに本研究では、ASD女性の日常における「社会適応」という、より当事者の日々の生活に即した具体的な困難について、インタビュー調査を通してボトムアップに取り上げ、当事者の日々の生活で感じている困り感をリアリティの高い形で理解し、本当に必要としている支援への示唆を得た。最後に、ASDの支援においてはライフステージを通じた支援が重要性であり、本研究では成人期の女性に必要な支援モデル構築に向けた具体的な知見となり、臨床的な意義があると考えられる。

研究成果の概要（英文）：This study explored the perceptions and behaviors of “social adaptation” of autistic women. The results suggest that, autistic women’s perceptions of adaptation were based on the accumulation of past negative experiences and social expectations. They engage in conscious and unconscious adaptive behaviors, at the same time, they live their lives while coming to terms with society in order to maintain the stability of their daily lives. Furthermore, the way of social adaptation was considered to be different in social expectations by gender and life stage. This study showed the importance of an environment where autistic women can accept themselves as they are, and society needs to change, rather than demanding adaptation from autistic people.

研究分野：臨床心理学

キーワード：自閉スペクトラム症 女性 社会適応 カモフラージュ

様式 C-19、F-19-1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

自閉スペクトラム症(以下、ASD)は、症例数の多い男性例をベースに理解やサポートがなされてきた。ASDの女性については、対人コミュニケーションスキルによって困難が“カモフラージュ”され、その実態や支援ニーズが見えにくくなっている可能性がある。しかしながら、日々の生活に目を移すと、女性であるからこそ求められるスキルの不足やその特性との相互作用から、困難に直面するようなケースが多々報告されている。そのため、「ASDの女性の特徴は何か」という問いを明らかにし、日常生活における女性特有の困難に対する支援を検討する必要がある。

ASDの女性の特徴を捉えるためには、より生活レベルでの「社会適応」を検討する必要がある。なぜなら、男性と女性では生活するうえでの社会的文脈が異なり、女性については学校・職場・家庭等において女性への社会的要請や期待があるものの、ASDの特性から女性当事者がこれらの期待や役割に応えることは容易ではない。さらに周囲の女性の性役割に対する期待と、ASDの女性自身が望む自分らしい生き方の間にはギャップが生まれ易く、それが当事者に困難や葛藤をもたらすという指摘もある。よって、男性とは異なるASDの女性にとっての「社会適応」を捉える必要があり、そのためには女性として生きる日々の生活における困難を丁寧に拾い上げることが重要である。

2. 研究の目的

以上より本研究では、当事者の日々の生活における具体的な困難を、特性との関連から検討することを通じ、ASDの女性の「社会適応」において、従来の男性ベースの理解とは異なる困難と支援のニーズについて明らかにする。併せて、ASDの女性のライフサイクルに沿った支援モデルの構築に向けた知見を得ることを目的とする。「社会適応」は周囲の基準や価値観で判断されて訓練や支援が行われることが多いが、本研究では当事者の視点に立つ。当事者の視点からASDの特性を持って生きることによる困難、すなわちASDによる「社会適応」上の「障害」を捉え直すことで、女性のASDに関してより深い理解につながると考えられる。また、当事者の声をボトムアップ的に描き出すことで、当事者の認識と周囲の理解との齟齬を調整していくような介入アプローチや、実態に沿った支援への示唆が得られると考えられる。

3. 研究の方法

本研究では、以下の3つの調査研究(文献レビュー調査、アンケート調査、インタビュー調査)により、上記の研究目的を検討した。

(1) ASDの女性の主観的経験に関する質的研究のレビュー調査

ASDの女性を対象とした先行研究のシステマティックレビューを行い、当事者の主観的な経験を理解し、支援していくための質的研究の課題と展望、およびこれまでの研究知見を明らかにすることを目的とする。具体的には、ASDの女性を対象として、主観的な経験について扱った質的研究の英語論文について系統的な論文プロセスに沿って対象論文を抽出し、それらの論文の特徴やテーマについてまとめる。

(2) 「社会適応」の認識に関する調査

① ASDの女性に対するインタビュー調査

成人期のASDの女性を対象とし、「社会適応」に関する当事者自身の認識を明らかにすることを目的にインタビュー調査を実施する。

② 発達障害者に対するアンケート調査

就労移行支援事業所や発達障害の当事者会等の利用者を対象に、「社会適応」の認識に関するアンケート調査を実施する。ASDに限らず、広く発達障害者の認識の特徴を明らかにすることを目的とする。

(3) ASDの女性の適応行動に関する調査

ASDの女性に特有の社会適応上の困難と、当事者が用いる適応のための対処方略(カモフラージュ)について、社会的相互交流場面、および広く日常生活全般に関して具体的に明らかにすることを目的として、ASDの女性を対象にインタビュー調査を実施する。インタビューと併せて、ASD特性、カモフラージュ行動、QOLに関する心理検査を用いたアセスメントを実施して、他側面から適応行動について検討する。

4. 研究成果

(1) ASDの女性の主観的な経験を扱った英語論文の質的システマティックレビュー

過去20年間に英語で刊行された、ASDの女性当事者に対する質的研究を対象とし、最終的に抽出された19編の論文について、対象となった論文の特徴、および各論文で示された結果の主なテーマをまとめた。その結果、「学校生活での困難」や「いじめや孤立」など、ASDの男女問わず共通して課題となり得るテーマに加えて、「女性同士の友人関係の構築と維持」「女性の社会的役割期待に関するプレッシャー」「女性のライフイベントに関わる困難」など、女性に特有のチャレンジも示された。そしてASDの女性が思春期以降、特性と社会環境との相互作用の中で

困難を経験し対処してきたことが、当事者自身の視点から明らかとなった。

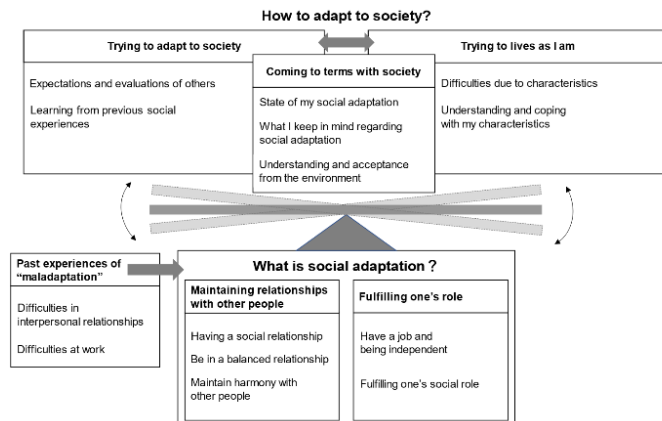
本研究の結果については、「自閉症スペクトラム研究」に掲載された。

(2)「社会適応」の認識に関する調査

①ASDの女性の社会適応の認識に関するインタビュー調査

16歳以上に初めてASDの診断を受けた、28～50歳の女性10名（平均年齢は36.7歳）を対象に、半構造化インタビューを実施した。得られた言語データについて、質的な分析方法であるグラウンデッド・セオリー・アプローチを援用して、「社会適応」の認識に関するテーマを抽出した。その結果、ASDの女性の社会適応の認識について、「安定した人間関係を維持すること」および「社会的役割を果たすこと」という2つの中心的なテーマが見出された。さらにこれらは過去の「不適応」の経験に基づいていたことが示唆された。当事者は、このような認識を持ちながらも、日々の生活においては社会とのバランスを調整しながら、自身の無理のない範囲で適応を図り日常生活の安定を保っていたことが示された。

この成果に関する論文は、BMC Psychologyに掲載された（以下は、得られた結果のモデル図）。



Appendix 3. Perception of social adaptation of autistic women

Sunagawa (2023)

②発達障害者の社会適応の認識に関するアンケート調査

知的な遅れのない発達障害者23名（男性18名、女性5名）から協力を得た。協力者の平均年齢は29.65歳（SD=7.54）であった。社会適応の認識に関する自由記述式の質問への回答について、質的分析法を用いてカテゴリー化した。その結果、「社会適応」の認識について、「対人関係の安定」、「自立」、「社会への貢献」そして「心身の安定」に関するカテゴリーを得た。また、協力者による社会適応の状態に関する量的評価には、障害特性による社会生活の難しさの程度や、就労や日常生活における実際の困難の程度が影響大きく、支援が必要だと考えられた。本研究の結果から、当事者の適応の認識には、周囲の評価だけではなく、自身で調整しながら生活が保たれているという自覚を持てることが影響していると考えられた。そのため、発達障害者の支援において、周囲の基準によって「適応できているか否か」を判断するのではなく当事者の主観的な認識を踏まえること、社会に合わせることを目標とするだけではなく、当事者が納得して自分らしく生きることを支えることが重要であることが示唆された。

本研究の成果は、日本自閉症スペクトラム学会19回研究大会、および日本発達心理学会第56回研究大会にて発表を行った。

(3) ASDの女性の適応行動に関する調査

①ASDのある女性の生活の質に関する調査研究

26～52歳のASDの女性21名から協力を得た。分析の結果、ASDの女性のQOLは低い傾向にあり、特に心理的領域および身体的領域の評価が低く、環境の評価が高くなった。主観的なQOLはASDの特性の強さと関連は認められなかったが、人間関係や社会的支援といった社会的領域に関するQOLについてはASDの一部の特性の強さと関係している可能性が示唆された。

本研究の成果は、日本自閉症スペクトラム学会第20回研究大会にて発表した。

②ASDの女性の適応行動（カモフラージュ行動）の特徴

20代～30代のASDの女性3名から得たインタビュー調査について、質的分析法を用いて適応行動の様相について検討した。その結果、カモフラージュについてネガティブな側面とポジティブな側面が示唆され、協力者はそれらのバランスを取りながらも、カモフラージュは社会で生活するために必要だと認識していることが語られた。また、協力者それぞれのカモフラージュの付き合い方が示され、より多様なカモフラージュのあり方が存在すると考えられた。

本研究の成果は、第63回日本児童青年精神医学会総会において発表した。

③ 中年期の ASD の女性の適応行動（カモフラージュ）の特徴

ASD の女性の社会適応のあり方は、ライフステージによって内容や認識が異なると考えられた。そこで、40 歳以上の中高年の当事者 5 名に焦点を当てて、社会適応のあり方の特徴について質的な分析方法を用いて検討した。その結果、加齢による生物学的側面、適応の動機に関する心理的側面、そして性役割期待といった社会的側面について中高年という時期特有の変化が影響した 3 つのテーマが明らかになった。ここから、ASD のある女性の社会適応について、ライフステージに特有の経験を探求する必要性が示唆された。

これらの結果について、国際学会（26th Congress of the World Association for Sexual Health）にて発表を行った。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Sunagawa Mebuki	4. 巻 11
2. 論文標題 How much of my true self can i show? social adaptation in autistic women: a qualitative study	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 BMC Psychology	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1186/s40359-023-01192-5	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 砂川 芽吹	4. 巻 43
2. 論文標題 成人期に診断を受けた自閉スペクトラム症者の自己効力感に関する基礎的研究	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 発達障害研究	6. 最初と最後の頁 120-130
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 砂川 芽吹	4. 巻 19
2. 論文標題 自閉スペクトラム症の女性の主観的な経験理解 海外文献の質的システマティックレビュー	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 自閉症スペクトラム研究	6. 最初と最後の頁 13-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 砂川 芽吹	4. 巻 21
2. 論文標題 「本当の思い」は隠されている？ 自閉スペクトラム症の女性のカモフラージュ	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 臨床心理学	6. 最初と最後の頁 203-208
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 砂川芽吹
2. 発表標題 自閉スペクトラムのある女の子・女性の社会適応：カモフラージュの視点から
3. 学会等名 日本LD学会第32回大会 自主シンポジウム 『発達障害児者の「生きがい」を支えるとは』話題提供
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Mebuki Sunagawa, Yuria Demizu
2. 発表標題 Camouflaging in middle-aged autistic women: A qualitative study
3. 学会等名 26th Congress of the World Association for Sexual Health (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 砂川芽吹
2. 発表標題 自閉スペクトラム症のある成人女性の QOL
3. 学会等名 日本自閉症スペクトラム学会 第20回研究大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 砂川芽吹
2. 発表標題 自閉スペクトラム症のある女性のカモフラージュ：当事者に対するインタビュー調査より
3. 学会等名 第63回日本児童青年精神医学会総会発表
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 砂川 芽吹
2. 発表標題 発達障害者の「社会適応」に関する認識
3. 学会等名 日本自閉症スペクトラム学会 第 19 回研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 砂川 芽吹
2. 発表標題 発達障害者の社会適応の認識とQOL, 自閉症傾向の関連
3. 学会等名 日本発達心理学会第56回研究大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 砂川 芽吹
2. 発表標題 成人期の自閉スペクトラム症者における「社会適応」とは - ある女性当事者の語りからその意味を考える -
3. 学会等名 本心理臨床学会 第39回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 砂川 芽吹
2. 発表標題 自閉スペクトラム症者の「社会適応」に関する認識 女性当事者に対するインタビュー調査から
3. 学会等名 日本発達障害学会第 55 回研究大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------